



KANSAI  
UNIVERSITY

# CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

## Newsletter

関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

March 2016

vol. 20

## アクティブ・ラーニングがいざなう Liberal Arts 教育

教育推進部 副部長 山本 敏幸

大学に入って学ぶ教養科目の位置づけについて考えてみたい。教養科目は専門科目を学び研究を始める前の心構えやある分野の人間の一般的な素養を身につけておくための科目群である。18歳まで親と同居し、衛生面、栄養面、経済面等のほとんどの生活の営みや心身の成長を親まかせで生きてきた子供が大学卒業時社会人として巣立っていくまでの4年間の大学生活で先ず履修する科目群である。ということは、これらの科目の履修を通して、大人としての社会的人間性が育まなければならないはずだ。

現に人間性ある医師の育成にと、コロンビア大学の医学部では、医療の知識しか持たずに人間性のない人間として深みのない医師ではこれからはいけないと、人間性育成のために絵画、芸術や音楽のカリキュラムを取り入れたそうだ。人間性のある医師となって、人生を送ってほしいという願いが込められている。

大学とは、ただの「社会人養成のための学舎」ではなく、人間性のある未来人を育てることが真の使命だと思う。つまり、大学とは人間性教育を基軸にしてアカデミックな環境で学ぶことが担保されないといけないところであろう。そのためには、教養科目を人間科学 (Human Science) の領域に位置付け、単なる知識情報の伝授や解釈に終始するカリキュラムではなく、人間の営みに関わる経験科学として位置付けなければならない。

こんなことを考えていたら、赤レンガの建物が青い空に映えるサザンイリノイ大学の光景が浮かんできた。イリノイ州の南の田舎町、カーボンデールにある赤レンガの校舎が印象的なサザンイリノイ大学を訪ねて久しくなる。何もない田舎道の横にポツンとたたずむこの大学はアメリカの教育に深く貢献してきた。ここは、1900年初頭の産業革命で賑わっていた時期、今から100年以上も前に、学習者主体のアクティブ・ラーニングを提唱し、実践していたJohn Dewey教授が教鞭をとっていた大学である。

John Dewey教授は教育者とはヒポクラテス宣誓を教育の場で実践し、これからの社会で活躍・貢献していく学生たちの模範となるようにお手本を示し、巣立っていく若者たちもヒポクラテス宣誓を実践していくことを願っていた。ヒポクラテス宣誓とは「学問を修めた者は、その知識を自らの倫理と責任に基づいて、人類や社会のために正しく用いていくことを誓うべきである。」というものである。大学で得た知識を安心・安全で平和な未来社会構築のために活用する知恵をもってこそ、豊かな価値が生まれてくるはずである。大学は知識だけを身につけるところではなく、それを活用する知恵を育まなくてはならない。そうすることで、自身の人生にも社会にも新たな価値を創造する力が生まれてくる。これを実践的に育むのが本来のLiberal Arts教

育 (教養教育) ではないかと考える。

教養教育の目的は、自身の専門知識に限定するのではなく、他の学問との関係性を深め、俯瞰的に多視点から知恵を育むことである。これは、「言うが易し」であるが、私がまだアメリカの大学で教えていた頃1990年後半から2000年初頭の間は、いろいろな学部の科目をアラカルト的に選択して履修するインターディシiplinary教育やいくつかの専門分野を統合化して多視点から専門分野の知識を学ぶインテグレイティッド・カリキュラムが試されたがどれもうまくいかなかった。失敗の原因は3つある。教育パラダイムが従来型の専門知識を身につけるだけの教育パラダイムで、学習環境にアクティブ・ラーニングを導入していなかったこと、学習者主体の学びの概念がなく、学習者がチームベースで学びを進めるPBLが普及していなかったこと、教員自身がチームワークで教育ができず、学習者に混乱や誤解を招き、いいロールモデルが示せなかったことが挙げられる。つまり、教養教育にはアクティブ・ラーニングに基づいた社会構成主義の教育パラダイムが根本になければならない。教養教育では、新しい価値を認める開かれた心、倫理観、優れた教養と知恵を身につけた全体人間を育てていかなければならない。つまり、教養教育はアカデミックな人間科学 (Human Science) の分野なのである。